

大映スコープ

総天 彩色

濡れ髪三度笠

おうわさあれこれ

「濡れ髪三度笠」のセットより

2909号

その一 雷ちやんの次回作

大映、田中徳三監督の「濡れ髪三度笠」で濡れ髪の半次郎と呼ぶ風流たる旗本になる市川雷蔵、原作「ジヤン・有馬の舞臺」で緊迫した沈痛な演技で開始したのとうってかわって、硬軟相まじえたフレキシビリティに富んだ演技を展開している。そのため、立廻りも田中監督の狙いもあって、前半は刀を抜かないで、有り合せの小道具を使ったコミカルな型でやり、ラストの大殺陣にはじめて長脇差を抜いて風流と斬りまくるわけだが、この前半の立廻りがコミカルとはいえず相当激しいもので、映画の中の至次郎がこの立廻りのたびに生創の絶頂なしというのと同じく、これを演ずる雷蔵も全身に打身やカスリ傷を作って全く滅身創痍の有様。そこで雷蔵、このキズだらけの手足をしみじみ眺めながら

「ボクの次回作は「切られ与三郎」にするかな」

その二 時代劇は好いけれど

ムード調の歌謡コーラスで人気最高峰の和田弘とマヒナ・スターズが、大映の「濡れ髪三度笠」(田中徳三監督、彩色)で、初めてチョン製をつけて出演したが、メンバーのいずれもが若い若手、大喜びでチョンバラ・マアングっこをやっている有様だった。

ところで、衆知の通りマヒナのコーラスは、諸々がお得意の楽器を奏しながら歌うのだが、ひとりバンドマスターの和田弘だけは、いつも編曲とスタイル・ギターだけで歌わない。

だが、時代劇ともなれば、映画の中でそれら現代劇的な楽器を画面に持ち込むことが出来ず、みんな歌だけということになって、ブレイバック(撮影前に吹き込んだ歌と音楽)に合わせて、それぞれ歌いはじめたが、珍らしく和田弘も歌っているの、「どうしたものか」と聞いてみると

「ボクからスタイルを取り上げられたら、とても間が持てませんから、ただ口をバタバタしているだけです」

特報

大映京都撮影所宣紙録
三度笠のセットより

映文